

小川哲著 『地図と拳』

(集英社)



一昨年の直木賞受賞作品。近年読んだことのない分厚さに怯んでしまいしばらく積読。覚悟を決めて読み始めたが、これがなかなか面白く一気に読み終えた。

満州の「李家鎮」という架空の都市を舞台に繰り広げられる日清戦争から太平洋戦争に至る興亡を描いた空想小説。統治しようとする者たちとされまいとする者たちとの思惑や憎悪が入り混じり凄惨な抗争が展開される。フィクションと思いつつも余りの残酷非道なシーンに何度も目をつぶりたくなった。また私の記憶のなかの歴史上の事件や、地名や、人名が度々登場してきて実はこれは史実なのではないかと錯覚することもあった。

国を造るということは白紙の地図に理想や理念を書き込んでいく作業で、本来形のないものを唯一形として表したのが地図であり、その地図を変えるのが「拳」であるという。人類から「拳」＝戦争がなくならない限り「地図」は「拳」によって書き換えられていくのだろう。いま正に「地図」が書き換えられようとしているのだ。(海老原光子)

岡崎琢磨著 『鏡の国』

(PHP研究所)



「装丁すら、伏線。」という帯がすごい。なるほど、本作のギミックは多岐にして複雑で、何より、徹底的である。ルッキズムという現代が抱える複雑な病を、複雑なま作品に投影している。

本作のタイトル『鏡の国』は、語り手・桜庭の叔母、室見響子の作中作のタイトルでもある。本作の大半はこの作中作に費やされる。響子は緻密な構成に定評のある作家であるが、編集者は作中作『鏡の国』には削除されたエピソードがあるのではないかと気付く。作中作の主人公・響(ひびき)は前髪が病的に気になる人物である。幼少期の「事件」がきっかけで疎遠になっていた郷音(ことね)と大人になって再会し、次いで幼馴染や同僚の男性二人(外見をめぐる病気を抱えている)を加えてストーリーは進行する。作中作の主旋律は前述の「事件」の調査だが、それが(小説の中の)現実世界にどう撥ねるのかという読みどころもある。どちらがどちらなのか? 意外性に翻弄され、展開に右往左往させられる。(清水佑太郎)